巻頭言
障害者地域作業所
ひかりそらいろ作業所
明石　洋子
発達教育
1998
3月号
より

我が家のレインマンは、ひょうきんな公務員

最近新聞紙上を賑わしている接待汚職やガマンできずにすぐキレる少年の犯罪の多発が、学歴を重視し心よりモノ・金を優先した社会の歪みと論じられるにつけ、それらとまったく無縁な我が息子の子育てを振り返り、本当の幸せは何だろうと今しみじみ考えています。

障害のある子の存在を家族の責任のように追い込む風潮（特に自閉症児は母親の子育てのまずさと言われた）が、まだまだ日本にはあるため（だから子殺しさえ起こる）、障害児の親としては周りに迷惑をかけぬよう（ほとんど無理！）常に子供とかかわり、コミュニケーションの手だてを探り、意志を確認し自主性を育むために選択肢を広げ（それでも少ない）、この微々たる進歩を喜び、「食べる、寝る、楽しむ等の生活を管理されるのでなく自分の意志で創りだしていく、そんな人生を送らせてやりたい」と願って（ささやかだなあ）、子育てをしてきました。この25年間、周りの人々の励ましと協力で、彼は驚くほど成長し、笑顔いっぱいの充実した日々を送っています。

多様な価値観を認められるようになれた私は「人」という最高の財産を増やし、ストレスをスパイスに、変化に富んだ人生を心より楽しんでいます。

当時重度（療育手帳A）の自閉症児と共に地域の中に飛び出すのは、誤解の多い病名ゆえに苦労を伴いましたが、どこかに預けて完治する病気ではない以上「治療より自立」を目標に、地域の中で一つ一つ学習していきました。水やトイレにこだわってよそのお宅に迷惑をかける対策に、そのこだわりをプラス思考して、トイレ掃除や風呂掃除さらに料理や洗濯等（自立に不可欠なのも理由の一つ）を、常に一緒に（目が離せないのが本音かな）日々の生活の中で地道にやっていきました。それが幸運にも仕事（川崎市環境局勤務）につながっています。またお店に入っては勝手に物を取った時期、超多動も地域との関係作りと。プラス思考し、お店に協力をお願いして物とお金の交換を教えました。次に物の代わりにお金を取るようになった時は、お金を先程の家事労働の報酬として渡すことにしました。

こうして金銭感覚や労働意欲が芽生え、同時に趣味や人間関係も広げて、お金を自分で有効に使うことを学んでいきました。汗水流して働いたお金は自分の生活に有意義に使えてこそ、成人期の主体的な生活と就労の継続ができるようです。

また障害がある故に必要だった特別な指導や配慮も、地域の中でを前提に、障害をありのままに認めてその中から特長を見い出し、必要な発達の手だてを工夫したことが、予想以上の自立を可能にしました。周りが本人の特性を知り工夫することで、可能性は無限になります。豊かな人生は、障害の程度よりも周りに理解し工夫する支援者がどれ位いるかにかかっているように思えます。次は結婚と夢いっぱいに彼は、今日も首を振り振りウキウキと飛ぶように走って仕事に行きました。見送る私はつい微笑んで…います。

（あかし　ようこ）